

方向補語を伴う移動表現の意味と形式

有対立空間における転位とその動力

杉村博文

(大阪大学大学院言語文化研究科)

要旨: 本稿は中根綾子(2008) 移動事態を表す Vx 句と V 到句の意味と形式 (『中国語学』255 号) を論評する形を採りながら, Vx 句—方向動詞“上, 下, 进, 出, 回, 过”を補語とする主体移動表現—の意味と形式の関係を論じる。Vx 句の意味と形式の分析において問題となるのは次の 2 点である。一, 方向動詞 x の表す方向という概念を正確に分析記述する。二, VxY という構造が x の表す移動事象のどこをどのようにプロファイルしているかを知る。本稿は中根(2008)の論点を検証しつつ, この 2 点について議論を展開する。

キーワード: 主体移動, 方向動詞, 対立空間転位, 述補構造

1. はじめに

中根綾子(2008) 移動事態を表す Vx 句と V 到句の意味と形式 (『中国語学』255 号) は, Vx 句 (例えば“跑进公园”) と V 到句 (例えば“跑到公园”) を比較しつつ, 両者が表す移動事象の基本的な相違を明らかにしようとしたものである。本稿は中根(2008)を論評する形を採りながら, 専ら Vx 句の意味と形式の関係について検討を加える。

V と x について説明を加えると, V は動作主体の移動を表す動詞 (“跑, 跳, 爬, 飞” など) を代表し, x は 5 つの方向動詞 (“上, 下, 进, 出, 回, 过”) を代表する^①。本稿ではさらに“公园”の位置に生起する名詞句を Y と記す。中根(2008)は Y を「方向動詞の目的語」と呼んでいる。

本稿は V 到句に対して特に言及することはせず, Vx 句の分析に的を絞る。Vx 句の意味と形式の分析において, 問題となるのは次の 2 点である。

- i. 方向動詞 x の表す方向という概念を正確に分析記述する。
- ii. VxY という構造が移動事象のどこをどのようにプロファイルしているかを知る。

中根(2008)はこの 2 点について従来にない主張を展開した。以下, その主張を紹介しつつ, 分析を加えてゆく。

①中根綾子(2008)は V の属性を具体的に規定していないが, 論旨と例文から主体移動動詞に限定することが可能である。x に“起”が含まれていないのは, “V 起”が「目的語に空間を伴うことができない」ためであると説明されている。これに対しては“爬起床”が唯一の反例となるが, “从床上爬起来”のほうが多用される。

老人“骨碌”一下爬起了床, 三五下穿好衣服, 用力推醒酣睡的儿子。

那天下午, 她昏昏沉沉地从床上爬起来, 走到厨房。

但し, xY と V から VxY が構成され, [(Vx)Y]と再分析されるという観点に立てば, “爬起床”の成立は十分に理解できる。“爬起床来”の例も挙げておこう。

她终于爬起床来, 穿着睡衣, 开了房门, 走到 614 房间门口。

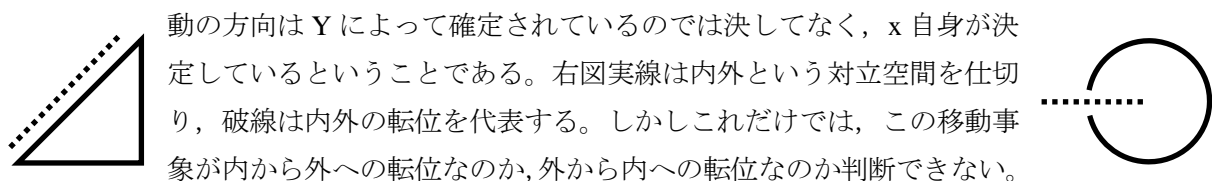
2. 方向と参照領域

2.1 中根(2008)は「方向」と「参照領域」をキーワードとし、 x と Y に対して以下のような定義を与える。

- i. x は方向を表すという点において他の動詞と区別される。
- ii. 方向とは一定の空間領域との関係において定まる概念であり、方向が示されれば、必ず参照となる空間領域が存在する。(下線引用者、以下同じ)
- iii. 移動事態において、空間領域は際立ちの与えられる要素の一つであるため、言語化され易い。
- iv. Y は x に内在する空間概念が具象化したもので、方向を定める参照領域として機能し、 x の方向を確定すると同時に、 x の具体性を欠く動きに対し動作としての具体性を与える。

この定義でiとiiiは特に問題はない^②。問題は「方向」を規定したiiと Y を規定したivにある。以下、 x の方向を確定する主体はなにか、 x における方向という概念をどのように考えるべきか、この2点について検証してみたい。 Y が x に対して「具象化」或いは「具体性付与」という意味機能を果たしているかどうかという点は問わないでおく^③。

2.2 “进门”と“出门”；“上楼”と“下楼”を例に採ろう。“进门”と“出门”の方向は反対であるが、 Y は同じである。“上楼”と“下楼”の方向も反対であるが、 Y は同じである。即ち、 x の移



同様に、左上図においても転位が上から下へなのか下から上へなのか、判断するすべはない。内外という対立空間の存在が“進”と“出”という動詞の意味解釈の一部をなす、上下という対立空間が“上”と“下”という動詞の意味解釈の一部をなすという主張は正しく、改めて議論する余地はない。しかし、それを「 Y は x の方向を確定する」と表現するのは妥当性を欠こう。転位の方向は x 自体の中に含まれていなければならない。

中根(2008)は x の抽象性を強調するあまり、 x 自体は絵に描こうとしても描けない、 V 即ち様態を伴って始めて描けると繰り返し述べる。例えば、

“上”という動作を絵に描こうとしても、“上”そのものを描くことはできず、これを描くなら歩いている様子で描くか走っている様子で描くか、何らかの様態を伴わざるを得ない。つまり方向動詞の表す動作は、具体的な様態もしくは実態を欠き、単に方向を伴う概念的な動きのようなものを表すだけなのである。(p. 160)

x が「具体的な様態」を欠くことは確かだが、その「概念的な動き」を図案化したもの、即ち x のイメージ・スキーマを描いたものは到る所に見られる。その意味では、 x を絵に描くことはむしろ比較的容易であるとさえ言える。

②iiiについては、論文の後半において V 到句との比較を通し、「 Vx 句が描く移動事態においては、〈参照領域〉により形成された空間領域を背景とし、移動の経路が前景化する」といった異なるニュアンスの記述も見られる。ここの「経路」は「軌跡」と読み替えられる。

③“上山”の情報量は“上”より多い。“下乡”の情報量も“下”より多い。しかしそれで“上”自体、“下”自体に具体性が加えられたと展開するのは議論に飛躍があろう。具体性付与という機能は Vx の V のためにとっておいたほうがよい。

以上2点から判断し、xはYに対しても、またVに対しても、一定の意味的自立性を保ち得ていると考えられる。

2.3 中根(2008)は、方向とは「一定の空間領域との関係において定まる概念」であり、「方向が示されれば、必ず参照となる空間領域が存在する」と説明する。動きを絵に描くのが容易な“进”を例に採ると、その方向は「外から内へ」、その参照領域は「内と外の別のある空間領域」と分析されている。これを見る限り、なんの変哲もない議論であり、特に問題はないように映る。ではxが“过”だと、どういう記述になるであろうか。

中根(2008)は“过”を「ある空間領域を過ぎる動き」、その参照領域を「少なくとも二辺の境界をもつ空間領域」と規定する。恐らく“过河”や“过马路”が典型事例として意識されているのであろう。そのことに問題はない。問題はこの定義には肝心の方向が見い出せないことである。「ある空間領域を過ぎる」がどういう意味において方向となり得るのだろうか。もし方向が見い出せないとすれば、“过”は移動方向を指定しない、よって“过”に方向動詞という呼称は不適當であるとするのも1つの処理方法である。しかし“过”が他のx“上、下、进、出、回”と完全にパラディグマティックな関係にあることは否定できない。とすれば、やはり“过”に方向を見い出そうとするのが正しい行き方であると言えよう。

本稿はxにとっての「方向」を「2つの対立空間を結ぶ関係」と規定してみたい。上と下、内と外は対立空間の典型であり、「元の位置」と「他所」は周縁的対立空間である^④。そこで、もし“过”の表す移動を「こちら」と「あちら」における転位、換言すれば、「こちら」と「あちら」を仕切る境界を越える動きであると捉えれば、“过”も「方向」を獲得することが可能となる。上へ、下へ、外へ、中へ、元へ、あっちへ、こっちへということである。

中根(2008)は“过”を「ある空間領域を過ぎる動き」と規定する。しかし、その空間領域が「過ぎる」という事象にとってどういう意味で存在しており、そこを「過ぎる」とどういう状況が生じるのかを考えれば、ぼんやり「ある空間領域を過ぎる」と表現するよりも、はっきり「境界を通過する」と規定するほうがまさる^⑤。

(1) 他们已经走过了两条街，现在走到第三个街口了。

(2) 这一天，我们从北京图书馆出来，边走边谈地穿过了北海大桥，来到团城侧面的梧桐树下。

この2例が典型的に示すように、ある空間を過ぎれば(波線部)、別の空間に到ることになる(実線部)。もし別の空間に到らなければ、まだ同一空間に留まっており、「過ぎた」ことにはならない。そして肝心の点は、2つの異なる空間が存在すれば、その仕切りとなる境界が必然的に存在することである。この境界は「らしくない」ものから、如何にも「らしい」ものまで様々あり、(1)(2)は「らしくない」例である。以下に「らしい」例を挙げてみよう。

(3) 子弹是穿过半开半闭的木门射进来的，木门上的木碴爆裂，弹洞赫然！

(4) 月光从高高的天上射下来，穿过窗户，斜照在郑波的床头。

次の(5)は再び「らしくない」境界の例である。この場合、下線部が表す事態は、目には見えないけれども、“步哨”とその域外という2つの空間を仕切る境界を設定し、そこを通り過ぎたと理解

④ “起”が表す方向についての対立空間は「地」と「上方」のようなイメージになろう。

⑤ 杉村(1992)参照。“过”を十全に記述するには様々な“引申用法”が合理的に説明される必要がある。「境界を通過する」と「ある空間領域を過ぎる動き」の優劣はその作業においてより明らかになろう。

すればいいだろう。

(5) 他们走过一个步哨的时候，心禁不住怦怦地跳，很担心他们会把他们拦住，幸而步哨把他们放过去了。

認知言語学の用語を用いれば、発話者の mental scanning (心的スキャンニング) によって“步哨”とその域外という2つの空間を仕切る mental boundary (心的境界) が形成されている、というふうに表示できる。

中根(2008)の方向に関する認識では“过”に方向を見出すことができない。その点も含め、中根(2008)は VxY という方向移動事象に関する認識、就中「空間領域」「参照領域」という概念を介した方向移動に関する認識を基本から洗いなす必要があるように思われる。

3. xY の形成と文法機能

3.1 中根(2008)は荒川(2003)を引き、「方向動詞が目的語に取り込める名詞は、“上车”、“进站”、“出门”、“回家”など慣用的なものが多い」と述べたのち、一步進めて、xY が「個別的もしくは臨時的な組み合わせの場合、たとえば“*上蓝天”、“*进黄河”などは成立しない。(略) このように方向動詞は虚詞的であっても、慣用の〈参照領域〉を明示することで具体的な動作を表すことが可能となる。しかしそれは、文において一つの出来事を表すには及ばない」と主張する。

xY に慣用的なものが多いという観察は基本的に正しく、その理由は、対立空間転位の認知に関する基本レベルカテゴリーが、中国語では恐らく Vx(Y) であることであろう^⑥。以下、実例を挙げることで、中根(2008)の指摘に見られる以下の2つの観察が誤りであることを示す。

- i. 「個別的もしくは臨時的な組み合わせの場合」、xY は成立しない。
- ii. xY は「文において一つの出来事を表す」ことができない。

3.2 xY が個別的あるいは臨時的な組み合わせである実例を示す。

上

(6) 海军70架“战损”飞机重上蓝天 (新闻标题)

(7) 我上了十米跳台，往下一看，立刻感到头晕目眩。

(8) 瑶表妹……恍恍惚惚上了带空调设备的飞机舱式旅游车，……

例(7)(8)の下線部は「個別的」な組合せであるが、慣用化した“上台”や“上车”をベースとしている。このようなケースは非常に多く見られるので、以下一々指摘することはしない。

下

(9) 等到最末一曲“一路平安”奏起，桌上的蜡烛一支一支吹灭，起身下了舞池，只剩我们这一桌上的一支蜡烛，真可称得上形影相吊。

(10) 她……颤巍巍地下了椅子，跑着遗像，走到司枫房间门前。

(11) 于是他又想下来去找民兵们问询问问。他这才又轻快地下树。

中根(2008)は“下树”を不成立とするが、例(11)のように用例は存在する^⑧。

⑥日本語は x(Y) が基本レベルカテゴリーである可能性が高い(杉村 2000b 参照)。基本レベルカテゴリーは単純語であるのが普通であるが、中国語は“金鱼~鲤鱼~草鱼……”とか“柳树~松树~槐树……”のように、複合語になることがよくある。

⑦文体に偏りが見られるが、“上蓝天”が成立することに疑問の余地はない。

歌曲：小飞机上蓝天 | 美术教案——让我的飞机上蓝天

进

- (12) 我有些尴尬地进了她的房间，坐在那张特大的沙发上。
- (13) 剃头匠提着一个小木箱，畏畏缩缩地进了死刑犯囚房。
- (14) 有的市民在那城市住了几十年，别说没进过那种地方，甚至听也没听说过。
- (15) 在妈妈的逼迫下，她还是免为其难地进了一所电脑学校（中专）念书。

出

- (16) 于是我们只能非常遗憾地看见老人拉扯着丫丫慌慌张张地出了学校的大门。
- (17) 葛老根看看她，又看看我，张大了嘴，“嗨，嗨”了半天，没说出话来，一直到他知趣地出了这个饭馆。

回

- (18) 在此之前。我只随父亲回了一趟江苏老家。
- (19) 铁军早就回了她那边的宿舍了，正躺在床上看书等着她呢。

过

- (20) 二人过了一条街，来到最繁华的路口，……
- (21) 她们……在过一道深水溪流时，有一个平时就向她涎皮赖脸的行政科长自告奋勇挺身而出背她过溪，……
- (22) 过河需要你；过茅草地也需要你带路，不然，他会迷路的。
- (23) 是，过了这块地才算出了百舍。

3.3 xY で「一つの出来事」が表現されている实例を示す。

- (24) 那年，他跟上羊信上山了。
- (25) 打井的机器该拆的拆，该卸的卸，由一只驴队驮着上了山。
- (26) 车到燕南煤矿，孟蓓下车了。
- (27) 车里一片惊叫声，小贼举着菜刀，一脚踢开车门，堂而皇之地下了车。
- (28) 薄护士狐疑地进了病房。
- (29) 火车已经“嗷嗷”地进站了。
- (30) 我一大早就出了门，骑上车就跑。
- (31) 王满堂答应一声出门了。
- (32) 在门口等我的他不见了。我一个人回了家。
- (33) 第二天，没事了，大家就都回家了。
- (34) 女人过了河，想到丈夫还在老阳儿里晒着，又踏着过河石跌跌撞撞地弯了回来，……
- (35) 好消息。前卫全部过河了。

中根(2008)は慣用的な xY について、一方で「日常的に高頻度で使用されることにより慣習化され、一つの動作行為を表す表現として定着したものと考えられる」と言い、一方で「意味上の自立性が低く、それだけで完結した出来事を表し得ない」と述べる。この相矛盾する2つ主張は、後者が“上山”と“爬山”を比較してのものであるとは言え、当然一般化が意識されているはずである。

⑧類似例を追加しておく。

这一枪，肖飞不但没有害怕，他反而停止了下树，歪着脑袋，顺着枪声又看望了一刹儿。

さらに中根(2008)は、以下の(36a)と(36b)の対立を根拠に慣用的なxYは単独では「完結した出来事を表し得ない」と結論づけているのであるが、(6)以下の例を見れば、(36a)の不成立が別の解釈を必要としていることは明白である。

(36) a.*小王昨天去上山。 ~ b.小王昨天去爬山。

詳しい調査が待たれるが、“去”(及び“来”)とxYとの衝突は、xYが“上山”のような空間移動性の強い事象を表すときに発生する。比較されたい。

(37) 他昨天去给王老师上坟了。

(38) 今天吃过晚饭，李燕碗都没洗，就去上网。

(39) 饮了半天清茶的记者看到菜来了，川流不息地去上厕所。

なお、中根(2008)は“小王昨天去上山看风景。”を「成立」と判定しているが、明らかな観察ミスである。この例は成立しない。

4. Vとxの関係

4.1 Vxについて、中根(2008)は以下のように規定する。

- i. Vx句は自由形式の動詞と拘束形式の方向動詞が組み合わさった動詞句である。
- ii. Vx句は、主要動詞の表す動作に方向動詞の表す〈方向をもつ動き〉という情報が加味された、単一の動作を表している。例えば“跑进”は、“跑”という動作が“进”の表す「外から内への動き」を伴って踊れる、ひとつの動作を表す。
- iii. 方向動詞は補語となって主要動詞に従属し、より自立的な動詞句を形成するため、単独の述語であっては成立しなかった目的語名詞との組み合わせが、Vx句においては自由に成立するようになる。例えば、

*上蓝天 ~ 飞上蓝天 *下树 ~ 爬下树 *过广场 ~ 跑过广场
*进黄河 ~ 跳进黄河 *出路面 ~ 冲出路面 *回椅子 ~ 坐回椅子

4.2 以上3点のうち、iiiは中根(2008)の言う通りかもしれないが、かなりの事実誤認がある。すでに上で指摘したように、“上蓝天”，“下树”，“过广场”は成立する。再度、用例を挙げる。

(40) 海军70架“战损”飞机重上蓝天 =例(1)

(41) 兰琴说，还没有下树，她就闻到了那种香味。

(42) 过了广场，他走进了一条小胡同。^⑨

また、“跳进黄河”と“坐回椅子”は、概念統合において“跳河”や“坐椅子”の存在に支えられている可能性がある。

(43) 你可以跳河跳崖上吊抹脖子，随你喜好，挨个试试也可以。

⑨中根(2008)の挙げる例は“过广场”であり、(42)は“过了广场”であるため、厳密な意味で反例とはなっていない。中根(2008)は“过广场”が成立しない理由を、述語の位置におけるxの使用制限、即ちxの構文的活動能力の弱さに帰す。しかしその一方で、中根(2008)は“过”の表す移動を「ある空間領域を過ぎる動き」と表現する。そこから“过广场”の不成立を予測することはできない。それに対し、杉村(1992)は“过”の動きを「境界を過ぎる」とした。そこから“过广场”の不自然さを割り出せば、“广场”の境界としての非典型性を理由とすることができる。“过河”，“过马路”と比較されたい。そこで、(42)のように作れば“广场”に境界としての読みが強化され、その結果、全体として成立に転じるというわけである。“跑过广场”に目を転じると、“过”は補語の位置にある。そのことが“过”の結果性、裏返せば“广场”の境界性を強化し、“跑过广场”を成立に導いていると考えられよう。

残るのは“*出路面”であるが，“出 Y”は通常「Y を出る」と理解され、「Y に出る」は有標の解釈であるため、「Y に出る」を表す“出 Y”が作られるには強力な動機づけが必要となる。“*出路面”が不成立なのもその線で理解できよう^⑩。“冲出路面”の成立を説明する理論は、現時点では中根(2008)しかない。

4.3 ii の解釈は大きな問題を孕む。もし中根(2008)の言うように、Vx が x の表す方向への動きを伴って現れる 1 つの動作にすぎない、即ち概念的に V と xY に分解できないのであれば、意味的に Vx と“往+方位+V”の区別がつかなくなる。例えば、

(44) 爬上~往上爬；跳下~往下跳；走进~往里走；走出~往外走；走回~往回走

Vx を V と x が動作と動作の方向を表す動きという関係で合体した「単一の動作」という理解は疑ってみる必要がある^⑪。

x(Y)の実現にはエネルギー（“動力”）が必要である。V は正しくそのエネルギーであり、その意味で、V と x(Y)は時間的に先後関係を構成し、論理的に因果関係を構成する。この先後関係と因果関係に基づいて Vx(Y)という形式が構成され、且つ状況に応じて“V 得/不 x(Y)”が構成されるのである。例えば下例(45)において、“进了书房”は先行文脈に示された“走”があればこそ実現した結果である。

(45) 祥子在前边走，高妈在后边叨唠，一同进了书房。

また、下例においても、文脈的に V の指定はないが、通常は人の移動のデフォルト値である“走”が V として存在すると理解される。

(46) 回到医院，严守一在外面喘了一口气，才进了病房。

要は、x(Y)が実現するには V というエンジンを必要とする、V なしに x(Y)は実現し得ないということであり、その意味において V と x(Y)を「因」と「果」という 2 つの事象に分解することが可能になる。もしも Vx が動作と動作の方向を表す動きという関係で合体した「単一の動作」にすぎないのであれば、“上升”“下沉”“回收”“过滤”等のごとく、〈方向+動作〉という形式にコーディングされてしかるべきであろう^⑫。

V と x(Y)が時間的に先後関係を構成するというのは少し説明が必要かも知れない。“走进教室”や“爬上树”の例を挙げるまでもなく、Vx(Y)において V と x(Y)は、通常、継起的にではなく同時的に実現する。x(Y)が V に附随して実現する以上、両者の関係はそうでしかありえないわけである。この絶対的な依存関係に基づき、本稿では V と x(Y)の間に時間的な先後関係をも認めた。

⑩ “出现场”（現場に出る）という警察用語がある。これを“走出现场”と表現すると、現場を離れることになる（現場を〔歩いて〕出る）。“V 出 Y”で構造的に「Y に出る」を表すには、Y に方位詞を加え“V 出 Y 里”，“V 出 Y 外”，“V 出 Y 面”と作る必要がある。

出院子里一看，果然，院墙上有字，不禁轻松起来。

想到回去要挨掌柜子的大嘴巴子，急得他退出门外，眼里还直转泪珠子。

当耘耘和母亲背着穿好衣服的妹妹走出外面时，夜色正浓。

警察游过来，指了一下侧面。那里一个人冲出水面，张开口想喊叫什么，没喊出声，又沉了下去。

二胖又浮出水面，他的嘴唇冻紫了。

据老乡说，那时经常有一尺多长的草鱼跳出水面掉在岸上，农民喂的猪就守在湖边等鱼吃。

⑪ “过”の場合、前置形式の方向指定は、2.3 で分析したように“往这边”とか“往那边”のように行うことになる。

⑫ “过滤”における“过”と“滤”は並列関係にある可能性が大であるが、ここでは敢えて奇を衒い、“过滤”をその他の例と平行するものとした。

中根(2008:171-173)は考察の結論として、Vx 句とは方向をもつ移動「動作」の表現であり、「(移動)とは、到達点を目指しそこに達するものではなく、移り動いていく過程なのである」という認識を示しているが、本稿の分析は、「Vx 句において V は移動誘発動作を表し、xY によって結果としての対立空間転位が示される^⑬。V は xY を実現させる動力であり、両者は因果関係を構成する。意味的には xY と V から VxY が構成され、構造的に[(Vx)Y]と再分析される」となる^⑭。

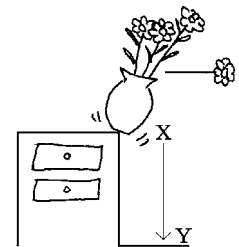
5. Y の意味役割と意味記述

5.1 中根(2008)は、V 到句の目的語は「到達地点」を表し、Vx 句の目的語 Y は「参照領域」を表すと主張する。そして Y を起点あるいは終点(加えて経路)と捉える先行研究に対し、2つの問題提起を行った。

- i. Y は x の違いにより起点を表す場合もあれば終点を表す場合もあり、また同じ x でも起点の場合もあれば終点の場合もあるという説明がなされることがあるが、Y のもつ共通の意味機能という観点からすると、本質を突いているとは言えない。
- ii. Y が終点を表すのであれば、なぜ V 到句と異なり、方位詞を付加することができない場合があるのはなぜか。

i で提起された、同じ x で Y が「起点」或いは「終点」を表すという主張に対する批判は首肯できる。但し、この主張は x が“下”の場合に限ってのみ該当し(杉村1983)、杉村(2000a)にすでにその修正意見が見られる。杉村(2000a)は、中国語において「～から…に落ちる」の全過程が1つの事件として捉えられる理由を以下のように説明し、

「下降」に対する「上昇」では「離脱」と「到達」に応じて語彙的に分化している。「離脱+上昇」は“起”と表現され、「上昇+到達」は“上”と表現される。我々の経験において、落下は必ず到達を伴うが、上昇は必ずしも到達を伴わない。立ち上がるとか、机の上の物を取り上げるとか、到達を伴わない上昇は現実生活において数多く体験する。中国語における上昇の分化([+到達]の“上”と[-到達]の“起”)と落下の未分化はこのような現実認識の反映と考えられる。



右図における“V 下 X”と“V 下 Y”を同一落下事象の異なる分節とみなす考え方を提起している。なお「～から…に落ちる」は、より厳密には「～を離れ一定の空間を下降し…に到る」となる。この点は第6章で詳しく取り上げる。

ii の問題提起は成立しない。Y が「終点を表す」という主張から、Y は方位詞を伴わなければならないという主張は生まれて来ないからである。VxY において「終点」と言うのに最もふさわしい Y は“上”が伴うものであろう。例えば、

(47) 男孩子的幻想总是带点冒险精神和传奇色彩，攀登珠穆朗玛峰，飞上月球，或者去神农架去探险。

(48) 哑巴和六个士兵提着木锨，小心翼翼地跳上木筏，木筏摇晃着，歪斜着，吃水线加深了许多，……。

⑬ “沉”や“浮”のように移動方向を自ら内在している V もいくつかある。

⑭ 一部“坐回椅子”のような特異な VxY がある。この場合は“坐椅子”を「先/因」，“回”を「後/果」と分析する必要があるだろう。

従来、このような用例に基づき Y が「終点を表す」と言ってきたわけだが (Y の位置に関するそれ以上の情報は、x が“上”であることで与えられるため、敢えて言明されないことが多い)、Y が方位詞を伴わなければならないという主張はそこに含まれていない。中根(2008)は“上”が従える Y を「(動作主体の位置から)上へ広がる空間領域」と規定する。しかし、こう規定すれば Y は方位詞を伴わなくてもよく、「終点」と規定すれば方位詞を伴わなければならないという解釈を要求するのは無理であろう (“V 上 Y”には以下で改めて言及する)。

5.2 中根(2008)は Y が基本的に方位詞を伴わないことのもつ意味を以下のようにまとめる。

- i. Y は方位詞をつけなくてもいいのではなく、本来方位詞をつけない。このことは、Vx 句の特徴としてもっと注目されてよい。
- ii. Y は量詞や方位詞により個体化される以前の形式であるため、指す対象は特定の個体ではなく、不特定多数の非個体である。Y にはだかの名詞が用いられることが、そのことの証拠となる。

以下、順序を逆にし、ii を先に論じる。

5.2.1 「方位詞の機能は、はだかの名詞を特定化し場所として個体化することにほかならず、これがいわゆる場所化の本質である」という主張であるが (p.164)、方位詞が付加されれば事物が特定化し、場所として個体化するとは限らない。例えば次の(49)は一般的道理を述べた文であり、“椅子”にも“桌子”にも特定化、個体化は見られない。

(49) 椅子上面可以坐人，桌子上面不能坐人。

このような状況は、四字句や俗諺においてよく見られる。

(50) 雪里送炭，锦上添花，纸上谈兵，棉里藏针……

(51) 桃保人，杏伤人，李子树下埋死人。

多く状況において方位詞が付かないことから、Y が日常言語的な意味における「場所」でないことは疑いえない。しかし、そこからいきなり Y が「特定の個体ではなく、不特定多数の非個体である」という結論に至ることはできない^⑮。以下に Y が「特定の個体」である例を挙げる。

(52) 我在黄羊堡初中的同学六六，在他14岁那年冬天的一个夜晚，爬上了一个名叫马小燕的女孩子的屋顶，结果被一发子弹打中。

(53) 他们走进了一家小小的餐馆，点了菜。

(54) 童非什么话也没说就走出了校长的办公室。

(55) 她咚咚咚地走回自己的卧房，砰的一声反锁了房门。

(56) 此刻，春日的余晖已跳过了院里尽东头一棵杨树的树梢，县委大院里显出一种异乎寻常的寂寥和冷落。

Y が「はだか naked form」で現れる場合は、基本的に前方照応的「定 definite」であると理解してよい。中根(2008)の先行研究である中根(2005:232-234)では、Vx 句の Y は「非指示」的で「総称的あるいは類的」であるため、後続文において照応的に用いることができないという主張がなされ

^⑮自ら Vx 句の対極に置く V 到句の Y に関し、中根(2005, 2008)は「特定の場所」を示すため「一」+数量詞を加えて不定成分とすることはできないと述べるが、事実に反する。例えば、

他们走到一个十字路口，看见便道边站着一个人，……

祥子……走到一块坟地，四四方方的种着些松树，树当中有十几个坟头。

ているが、これに対する反例も造作なく見つかる^⑩。例えば、

(57) “陈默你先坐，我正听个电话，是支队打过来的！”说着师永正就走进了书房，从书房里传来师永正洪亮的声音，……

(58) 我走进了村里，村里的安静如不见风的林地一样铺在我的面前。

(59) 跑到后来她体力不支，便爬上了一棵小树，树的叶子已经被吃得干干净净，就连树皮也剥光了……

x が“出”や“过”の場合は Y が後続文において照応的に働く例を発見することは困難であるが、それは Y が移動主体の新たな活動地点として視界に入って来るのではなく、移動の後に置き去りにされ、視界から消え去って行く地点として提示されることによる。

とは言え、中根(2008)の Y に対する「非個体」という認識はある意味で核心をついている。Vx 句と V 到句を違いを端的に物語るものとして、次の 2 例を考えてみよう。

(60) 爬到了十八层

(61) 爬上了十八层大楼

(60) は「18 階に上った」と訳せるが、「18 階まで上った」と訳すほうがより明晰な表現となる。一方、(61) は「18 階建てのビルに上った」としか訳せない。(61) における「18 階建てのビル」は非常に高さをもった事物として捉えられ、その属性(高層性)がプロファイルされている。Vx 句が方位詞を排斥する理由の 1 つはここにあり、このような状況において、中根(2008)の言う「非個体」が意味をもって来る。但しこの場合、Y は決して「事態において背景化し、非点的な参照領域として存在している」のではない。Y はその属性がプロファイルされた事物として存在し、事態においては前景化していると理解すべきである。

5.2.2 (61) のような場合を除くと、Y に方位詞が付くか付かないは基本的に x と Y の意味関係による。付加する、付加しないの選択基準が VxY という構造の規則として準備されているのではなく、x の意味的個性にもとづいて決定されるということである。“进”と“出”を例に取り説明してみよう。Vx 句で Y に方位詞が付くのは、x が“进”である場合に多い。比較されたい。

(62) 小柳叶鱼儿在火上滋滋地冒着油儿，甜丝丝的香味钻进了璇儿的鼻子。

(63) 不由地他把手伸进了怀里，一股恶浊的汗气痒痒地钻进他的鼻子里。

“进”の反義語である“出”の場合、Y が方位詞を伴うことはないが^⑪、この理由は想像に難くない。“出”にとつての Y は内と外を隔てる仕切りに過ぎず、Y の内部空間が“出 Y”という事象に關与する動機づけは弱い。邱广军(1982)は“V 出 Y”の“出”を“在由内向外移动过程中达到并离开处所边界线”と表現している。一方“进”にとつての Y は内と外を隔てる仕切りであると同時に、移動主体が仕切りを跨いだ後に逗留しつづける空間であり、Y の内部空間は移動主体の活動に強くコミットしてくる。方位詞の付加はその反映である。この間の事情は日本語にも反映が見られる。比較されたい。

⑩ Y が前方照応的に指示詞によってうけなおされた例を挙げておく。

不知不觉地，邱裴蕙又绕回了她家附近，那里一连有五座斜竖着排列的塔楼，完全是按同一种图纸盖出来的，……

⑪ 注⑩を参照されたい。なお、Y が単音節名詞の場合、方位詞“里”の付加が顕著となるが、これは韻律という意味論以外の要因による。例えば、

走进屋里 | 滚进河里 | 掉进粥里 | 躲进山里 | 流进嘴里 | 跑进雨里 | 钻进车里 | 飞进巢里
转回屋里 | 返回洞里 | 走回家里 | 折回村里 | 退回门里 | 跌下潭里 | 落下河里 | 咽下肚里

(64) 教室に入る, 教室の中に入る

(65) 教室を出る, [?]教室の中を出る

多くはないが, “回”と“上”の例も挙げておく。

(66) 原来她们又跑回高粱地里边, 在一个小土墩子后边趴下了。

(67) 有时把衣裳晾在树杈上或者山石上后, 她就带我爬上水潭上面的山梁子上, 从这儿往山下看一切都清清楚楚, 河、村子、树林、坟地、草垛, ……

6. 方向動詞のもつアスペクト特性

6.1 例えば“V上Y”と“V下Y”におけるYを, 中根(2008)は「(動作主体の位置から)上へ広がる空間領域」「(動作主体の位置から)下へ広がる空間領域」と規定する。「上に」「下に」ではなく, 「上へ」「下へ」である点に注意されたい。これは中根(2008)がVxYにおけるxに「Yに対し時間の経過を以って線的に働きかける動き」という「過程性」を認めることに対応する。中根(2008)はxの「過程性」について以下のように述べる。

- i. xは「方向をもつ動き」を表す。方向をもつ動きとは, Yに対する線的な動き, 即ち「Yに対して時間の経過を伴って働きかける動き」のことである。よって, xは「過程性」というアスペクト特性を具えると言える。
- ii. xはVを限界化すると同時に, 事態に過程性を付与するため, Vx句は限界性および過程性をもつ非点的事態を表す。

続いて, 「Vx句が非点的事態を表すということは, 起点を表す“从”句との共起において確認することができる」と述べ, 以下のように議論を展開する。

[?]小王从车站跑进了教室。

この例は不自然である。「Vx句においては, ある種の“从”句は意味上不自然となり, 用いにくい。なぜならVx句は方向を伴う動作の全過程を含む非点的事態を表しているため, 起点は動詞句において制限されており, “从”句により起点を明示する場合には, それと齟齬があってはならないからである。」

小王从后门跑进了教室。

“车站”を“后门”に換えれば, 問題がなくなる。なぜなら「この場合の“从”句は, 起点というよりは経路を表している。ここで“从”句が経路の読みとなるのは, まさにVx句が時間の過程性をもつからである。」

これが論証になっていないことは誰の目にも明らかである。

- 一, 論証すべき命題は「Vx句が非点的事態を表す」である。しかし後続の文において, その命題が, 論証なしにいきなり別の命題「“从”句により起点を明示する場合には, それと齟齬があってはならない」の根拠として使われている。
- 二, 「駅から教室の中に」が時間の経過を伴って働きかける線的な動きにならず, 「教室の後ろの入り口から教室の中に」がどうしてそうなるのか。Vx句が「動作の全過程を含む非点的事態」を表すなら, 例文の成否はむしろ反対でなければおかしい。“[?]小王从车站跑进了教室”が不自然な理由は, 中根(2008)が自ら語る如く, “跑进教室”に対して起点を設定するなら「内の領域と連続して(もしくは近接して)存在する領域である。したがって, (参照領域)である“教室”とは空間的に全く関連のない“车站”は, “跑进教室”の起

点としては不自然となってしまう」からであるが、問題は、ここに「過程性」なる概念がまったく関与していないことである^⑩。

「過程性」について、中根(2008:174)はさらに次のように述べる。

過程性とは時間の推移に伴い位置や状態を変化させていくその展開過程であり、内部は異質である。また、〈方向をもつ動き〉は動きの過程の総体を表しているため、“正在跑进教室”は不自然となる。進行を表す“在”は「…という動作が今同時にある、(その時)同時にあった」(井上・生越・木村2002:152)という意味であり、ある時間参照点において動作を切り取ったその断面の状態を表すものである。この“在”の時間軸上の一点を切り取るという機能と過程性は矛盾するため、上述例は成立しにくい^⑪。

この段落の論法を採るなら、例えば電力会社の作業員が電柱を一步ずつ登って行く場合、一步登るごとに「異なる登り」が存在することになり、一步一步を連続させ「同じ登り」が進行最中にあると把握することができないことになる。しかし、その動きを“他正在爬电线杆”と表現することができる。この場合、“爬电线杆”は明らかに時間の推移に伴い位置や状態を変化させている。それにもかかわらず、“正在”とは決して矛盾しない。

同じ動きを“*他正在爬上电线杆”と表現することはできない。時間の推移に伴い位置や状態を変化させていく展開過程を表現しうるのはVY(“爬电线杆”)であり、VxY(“爬上电线杆”)ではない。換言すれば、“爬上电线杆”の“上”は「時間の推移に伴い位置や状態を変化させていくその展開過程」を言っているのではない。もしそうなら“*他正在爬上电线杆”が成立しないことの説明がつかず、“爬上了电线杆”が成立することの説明もつかない。“爬上电线杆”が「展開過程」を言うものなら、“爬上了电线杆”はどういう状況に対応するのか。“他爬上了电线杆”と聞いてネイティブが瞬間的に脳裡に描くイメージは、男が一人電柱のかなり高い所によじ登り静止している様である。「過程」ではなく、「完了」がプロファイルされている。

6.2 “V下Y”についても見ておこう。繰り返しになるが、中根(2008)は“V下Y”におけるYを「(動作主体の位置から)下へ拡がる空間領域」と規定して、「その空間領域に沿って下へ動くのが“下”である」と述べる。一定量の空間を上昇しなければ“上”という事態はありえないし、同様に一定量の空間を下降しなければ“下”という事態もありえない。改めて言うまでもないことである。問題は“上”が単なる上昇運動ではなく、“下”も単なる下降運動ではないという点である。“上”

^⑩本稿は“后门”を「教室の後ろの入り口」という意味で理解しているが、この理解は中根(2008:170)が“小王从后门跑到了教室”を「不成立」と判定していることから考えてまちがいないと思われる。しかし中根(2008)は一方で「経路」を「通過点」ではなく、非点的領域であるYに対して時間の経過を伴って働きかけた結果として生まれるものであると説明し、線分的な軌跡をイメージしている。そうすると“后门”を「教室の後ろの入り口」と理解することは難しくなる。もし“后门”を「学校の裏門」と理解すると、教室まで一定の距離があり線分的軌跡を描けるが、今度は“小王从后门跑到了教室”を不成立とする根拠がなくなる。比較されたい。

开往西安的车停在站台上。我跑上车，从车尾跑到第一车厢。

从山下爬到山上这一段路，(伤口)几乎就敞开着，洒在路上的血几乎就没断头。

また、たとえ“后门”を「学校の裏門」と理解するとしても、それでもって“从后门跑进教室”に「時間の経過を伴って外から内へ教室に働きかける線動的動き」という解釈を与えるには、十分な説明の言葉が必要である。

^⑪本稿は「…という動作が今同時にある、(その時)同時にあった」を「ある時間参照点において動作を切り取ったその断面の状態を表す」と読み替えることはできないと考えるが、とりあえず触れないでおく。

は上昇に到達が加わった移動を表し、“下”は5.1で既述のように、下降に到達が含意された移動を表す。例えば、

(68) 桌上的汽水瓶被她碰翻了，还嫌不够热闹似的轱辘地滚下桌子，砰然一声化做碎片。

(69) 上官金童沉下河底，看到娜塔莎像鱼一样在水草间游动着，……

(68)では下降の起点のみが示され、終点(“地”)は言明されていないが、後続文から“地”への到達が実現したことは明らかである。(69)では逆に終点のみが示され、起点(“河面”)は言明されていない。下降の起点と終点をともに言明すると、通常“从+起点+V+下+終点”という形にコーディングされる。

(70) 大白猫“噌”地从饭桌上跳下地，碰倒了一瓶牛奶，……

ここで確認しておくべきは、上の3例において、動作主の位置から「下へ拡がる空間領域」や「その空間領域に沿っての動き」はまったく観察者の意識に上って来ない点である。それは改めて言うまでもない情報として暗黙裡に処理される。

次の例では起点と「下へ拡がる空間領域」が示され、終点は明らかにされていないが、表現の重点は坂を転がり落ちる過程にあるのではなく、“侥幸没死的司机发现草丛中的白骨”という後続文からも分かるように、坂の下に転落したことにある。

(71) 据说是一个从公路上翻车滚下大坡侥幸没死的司机发现草丛中的白骨。

よって、大きな視点で捉えれば、“滚下大坡”と(68)の“滚下桌子”に本質的な違いは存在しない。

“上”と“下”に関する記述を十全に行うには様々な“引申用法”を説明しなければならない。「動作主体の位置から上/下へ拡がる空間領域に沿って上/下へ動く」という規定では、その作業を順調に進めることは難しいと思われる。

6.3 次の観察において、中根(2008)のVxに対する「過程性というアスペクト特性」の付与は端的な破綻を見せる。

“V回”は、“从”句と共起する場合、意味上の制限は課されず、“小王从车站跑回了教室”は成立する。なぜなら“回”の〈参照領域〉は、意味上到達点と重なるためである(ゆえに“回”に限り“回到家里”が成立する)。しかしだからといって、これはV到句における起点と到達点の関係と同じということではない。

中根(2008)の指摘にも関わらず、“x到”は“回”ばかりでなく“上，下，进，出，过”のすべてにおいて成立する。

(72) 十只色彩怪诞的毛绒绒的小鸡雏在王家屋里互相追逐，幸福地啄着小米，自由地随处排泄。有时上到床上，有时上到桌子上，有时上到门墩的电脑上，景致美丽极了。

(73) 井很窄，脚踏两面石壁，人就可以下到井底。

(74) 于莲舫拿着大哥大进到自己的南屋，只一会儿就出来了。

(75) 他坐在桌上写完了信，出到屋门口叫道：“张铁锁！到五爷公馆去一趟！”

(76) 她从厨房径直过到他的身旁，倚在沙发上，……

しかし、“*Vx到”は基本的に成立しない。これは、xと“到”の機能が「非過程性」という点で重なっているからであろう。

7. おわりに

中根(2008)は結論において、Vx句とはxの描く運動、即ち時間の経過を伴い、経路を描きながら

移動していく過程を描くものである主張する。しかしながら、言うまでもなく「到達」がなければ“上,下,回”はありえず,「通過」がなければ“进,出,过”もありえない。「到達」と「通過」が完了して始めて個々のxが意味する対立空間転位は完成する。この意味において,Vx句にあっては対立空間転位完了の瞬間こそが取り立てられ,移動の過程は背景化する。だからこそ,Vx句は“了”を容認し,“在”を拒否するのである。

対立空間転位完了の瞬間が取り立てられるというVx句の特徴は,主体移動から客体移動に目を転じたとき,より鮮明に現れる。例えば,

(77) 他从桌子抽斗里取出了他们两个人的影集,装进了皮箱。

(78) 两个小时后李春强被推出了手术室,像死人一样昏睡着。

また,中根(2008)はV到句とVx句を比較し,前者では結果(位置の変化)が焦点化され,後者では動作(移動の過程)が焦点化されているという。しかし,その観察は果たしてどの程度ネイティブの語感と一致するのだろうか。比較されたい。

(79) 他们没有想到,所有的人都没想到,六六在这天晚上的半夜时分通过自己家的天花板真地爬到了那个乡邻的女孩的屋顶,并被那个女孩父亲的警卫员开枪打中。

(80) 后来就发生了六六被打死的枪击事件。六六在一个夜晚爬上了马小燕屋顶的天花板上面并被马小燕父亲的警卫员开枪打中。

“爬上了”よりもむしろ“爬到了”のほうがより強く到達点に到る移動の過程性を喚起させるというネイティブの反応は決して少なくない。文脈をなくし単純化した“小王爬上了树”と“小王爬到了树上”の比較においても反応は変わらない。“一步一步V到(了)Y”と“一步一步V上(了)Y”をコーパスで検証しても,V到句の使用頻度がVx句に劣ることは恐らくないと思われる²⁰。

以上,中根(2008)を論評する形を採りながら,Vx句の意味と形式の関係について検討を加えてきた。本稿は多くの点で中根(2008)の得た結論を否定したが,それは基本的に言語事実に対する観察の相違に基づく。今後の研究は,先ずこの点を正確に検証することから始めなければならないであろう。

参考文献

杉村博文(1992)〈現代中国語における「むこう」と「こちら」の諸相〉,大河内康憲編『日本語と中国語の対照研究論文集(上)』,p.153-180,くろしお出版,1992年。

———(2000a)〈方向補語“过”の意味〉,『中国語』2000年1月号,p.58-60,内山書店,2000年。

———(2000b)〈“走进来”について〉,『荒屋勤教授古希記念 中国語論集』,p.151-164,白帝社,2000年。

松本曜編(2003)『認知意味論』,大修館書店,東京,2003。

中根綾子(2005)〈動趨式が表す本質的意味—動結式との対照から〉,『中国語学』252号,p.229-246。

———(2008)〈移動事態を表すVx句とV到句の意味と形式〉,『中国語学』255号,p.157-176。

刘景农(1994)《汉语文言语法》,中华书局。

²⁰ 筆者の個人データベースではV到句の5例に対し,Vx句3例という結果であった。

- 邱广军(1982) 与“〔动词+‘出’〕+宾语”有关的几个问题，《语言学论丛》第九辑，p.60-95，商务印书馆，1982年。
- 杉村博文(1983) 试论趋向补语“ .下 ”“ .下来 ”“ .下去 ”的引申用法，《语言教学与研究》1983年第4期，p.102-116。
- 沈家煊(2003) 现代汉语“述补结构”的类型学考察，《世界汉语教学》第3期，17-23页。
- Christine LAMARRE(2007) 从趋向范畴的方言表述看“书面汉语中的不同层次”的判定，《中国語学》254号，p.51-73。